

月刊

2018

12  
月号

# みんぱく



25774

学園紛争—54

15774

学園紛争に對しては、まゝにそれ  
意したのだから、いつまでかはいと注

特集

# 1968と人類学

東大闘争と人類学と民博 清水昭俊  
大阪万国博覧会とハンパク運動 山路勝彦  
半世紀後からみた全共闘・探検部 小林茂  
直接民主主義の実験と大学創造運動 荒川章二  
学生運動から水俣病闘争へ 平井京之介



# 日本の新左翼学生運動の転換点

パトリシア・スタインホフ

プロフィール  
1941年米国ミシガン州生まれ。ハーバード大学にて博士号を取得。現在ハワイ大学社会学部教授。日本の左翼運動を中心に、日本社会や社会運動を研究する。著書に「死へのイデオロギー——日本赤軍派（岩波書店、木村由美子訳）など。また、「宿命——」と号し「亡命者たちの秘密工作」（高沢監司著、新潮社）を英訳し、ハワイ大学出版局より出版。

六十年代後半、世界各国で類似の新左翼運動が展開された。日本での運動の成り行きを知るため、私は主に参加者による論文、本、インタビューなどの回想と事件現場の報告書を使うことにしているが、当時の新左翼学生の回想録を読むなかで、10・8（じゅっばち）が日本の新左翼学生運動にとって大きな転換点となったことを知った。その日のデモは激しく、最初の犠牲者が出たため、学生達が運動をやめるきっかけにもなりえた。しかし逆に、そのデモ以降、彼らの多くが運動にのめり込むこととなった。日本では一九六五年以降、時折デモがおこなわれていたが、一九六七年一〇月八日の事件は特別だった。事件の経過はマスコミの報道よりも学生組織の機関紙に詳しい。その日、佐藤首相のベトナムへの外遊を妨害するため、学生達は羽田空港に集まった。長い棒（ゲバ棒）に労働者ヘルメットの出で立ちで内ゲバをするのは、それまでは新左翼系の学生組織内の争いに限られたことであつたが、10・8で初めて機動隊にたいしてもゲバ棒とヘルメットが使用された。機動隊は羽田に続く橋や高速道路の入り口で機動隊と衝突した。装甲車の上で組織の旗をひるがえすなどの象徴的な行動をとる者もいた。

川の上では、大勢の人々が闘争を眺めていた。それまでのデモと同様、学生は機動隊に石も投げつけた。機動隊員は事前に準備した大きなネットを高く掲げ、自らの安全を確保したが、投石が激しくなると橋の反対側へと撤退した。現場の学生も、テレビで闘争を見ていた学生も、機動隊の逃走を見て「デモ隊が機動隊に勝っている！」と感じた。「権力は絶対ではなくて、力をもって打ち倒す事ができる」と直感した。

機動隊が逃げたため、ある学生が橋の真ん中に停められた装甲車に乗り、空港の方へと走らせた。装甲車の周りを走ったり、橋の上で放水車と戦ったりする学生もいた。突然、学生の一人が倒れた。機動隊がデモを止め学生達を追い出した。京都大学の学生、山崎博昭氏が救急車で病院に運ばれたが、亡くなった。「機動隊が殺した」という噂で憤慨した大勢の学生達は、弁天橋へ戻って追悼デモをしようとしたが、彼らは川の上で見守る人々の目の前で、機動隊の催涙弾と放水をあびて橋から追い返された。

学生の回想録には、「山崎さんが死んだので、自分はその代わりに運動しなければならぬ」という彼らの10・8にたいしての気持ちが残されていた。

月刊  
**みんぱく**

12月号日次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>10・8——日本の新左翼学生運動の転換点</b><br/>パトリシア・スタインホフ</p> <p>2 <b>特集 1968と人類学</b></p> <p>東大闘争と人類学と民博<br/>清水 昭俊</p> <p>4 大阪万国博覧会とハンパク運動<br/>山路 勝彦</p> <p>6 半世紀後からみた全共闘・探検部<br/>小林 茂</p> <p>7 直接民主主義の実験と大学創造運動<br/>荒川 章二</p> <p>8 学生運動から水俣病闘争へ<br/>平井 京之介</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/><b>いのししのかたち</b><br/>丹羽 典生</p> | <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/><b>メキシコ仮面に見るクリーチャーたち (2)</b><br/>——テロロアパンの悪魔<br/>アンソニー・シェルトン</p> <p>16 新世紀ミュージアム<br/><b>沖縄空手会館資料室</b><br/>相島 葉月</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/><b>イラン人の人づきあいの機微を知る</b><br/>——「ママのお客」<br/>藤元 優子</p> <p>20 ながなんちゃ<br/><b>ハニーホテル</b><br/>大澤 由実</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|

# 1968と人類学

ベトナム反戦、公民権運動、公害問題などをめぐり、世界中でさまざまな社会運動や学生運動がわきたった一九六八年。大学と学問研究のあり方もするどく問われた。日本も、また人類学・民族学も例外ではなく、一九七〇年の大阪万博、その後の民博設立に批判を向けた運動もあった。五〇年後の今、一九六八年と人類学を振りかえる。

ただし、それが東大闘争のすべてではない。大学に対する批判は、自治能力の欠如、大学自治の理念に反する国家権力の導入、批判的学術精神を裏切る権力的な学生管理、権威的で家父長的な学内組織など多岐にわたった。さらに大学院での闘争は、全学の問題とともに、所属コースに密着した問題も追及した。

## 文人闘争

当時、わたしは文化人類学コースの院生で、典型的なノンポリだった。六月の機動隊導入のころからコース院生のあいだで議論が始まり、遅れて一〇月に、過半数ギリギリが賛同して「ストライキ」を宣言。賛同者は闘争委員会（「文人闘争委」と略称した）を構成し、東大全共闘と連帯しつつ独自の「文人闘争」を闘った。

文人闘争委はストライキ開始から約一年半、コースにかかわる多くの問題で教官会議と対峙した（ただしゲバルト色はなかった）。学内の紛糾は傍観して自身の研究に専念する教官の責任、院生の研究と就職を制約する環境の改善（指導教官制の撤廃、教官が一手に斡旋していた就職、アルバイト、留学の情報公開など）、人類学と大学と社会の関係などの問題である。

## 万博協力反対、民博設立構想反対

研究者と大学（ないし学会）は人類学を用いて社会と関係する。その在り方を問題にして学外でも行動した。文人闘争に先立つ事柄だったが、六八年夏に開催された国際人類学民族学会議に関連して、

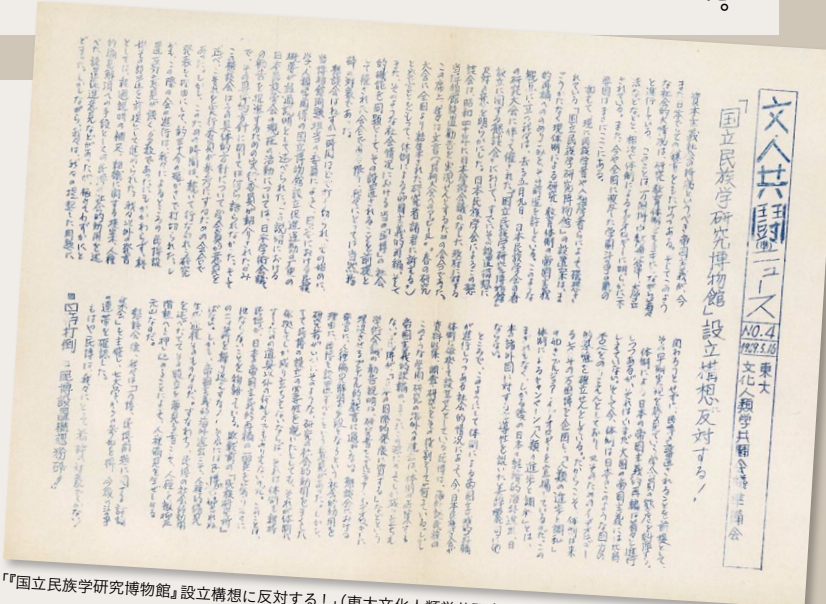
## 東大闘争と人類学と民博

清水昭俊 民博名誉教授

### 学生運動、学外から学内へ

一九六〇年の安保闘争では学生運動が高揚した。多くの場合、学生は大学学部の学生自治会ごとくに集団で街頭に繰り出し、執行部を握る政治団体（共産党系、新左翼系の党派）のデモ隊に加わった。しかしその後、学生の大半が政治に無関心な「ノンポリ」となり、「ベトナムに平和を！市民連合」などの市民団体や新左翼諸党派は、ベトナム反戦、米軍基地闘争、成田闘争などの運動を進めたものの、学生の組織的参加は沈滞した。市民団体の街頭デモは平和的だったが、新左翼諸党派の方は六七年ごろから「ゲバルト化」し、つまりヘルメットと角材の「ゲバ棒」で「武装」して、警察機動隊と衝突するようになった。

一九六七年末から七〇年にかけて全国に広がった大学闘争は、学内問題で学生が大学と闘い、その延長で政治権力と闘った点で、それまでの学生運動とは異質だった。全員加入と多数決の民主的制度で会員を拘束する学生自治会にかわって、個々人が自由に主体的に参加する（そして離脱も自由な）全共闘という運動の組織形態も新鮮だった。わたしの在学した東京大学では、六七年の末以来、医学部の無給研修医制度の改革を要求する学生と学部の対立が長引き、六八年六月に学生側の実力行使で大学が警察機動隊を導入して排除した。それを機に大学本部に対する批判



「国立民族学研究所博物館」設立構想に反対する！」（東大文化人類学共闘会議準備会の配布ビラ、1969年5月16日）

参加者向け周遊旅行を委嘱された旅行社が、「アイヌ村」訪問を含む北海道旅行を企画した。春先に配布された旅行案内は、「アイヌ」を「隔離された原住種族集団」とし、訪問先の「アイヌ村」は「全ての訪問者が自由に視察できる」と説明していた。不正確でアイヌの人びとに対して侮蔑的な、そして人類学者を尊大な「視察」に誘う説明である。同級だった河野本道さんとわたしは、国際会議の組織委員会（東大教官も加わっていた）に何度か抗議文を送り、旅行案内の訂正と「アイヌ村訪問」の取り止め、企画の再考を求めた。

ストライキ開始のころ、七〇年開催の大阪万博に関連する人員募集が、教官から闘争メンバーにも伝えられた。会場に展示する仮面など生活用具の「収集団」を「低開発国に派遣する」事業だった。経済復興を遂げて海外進出に邁進する経済界の気運に、有力な人類学者が人類学を用いて協力しようとして



安田講堂の攻防を伝える新聞（朝日新聞夕刊、1969年1月18日）

が全学に広がり、学生院生が組織した東大全共闘による「東大闘争」に発展した。秋になると学生間の党派対立が激化し、諸党派が「外人部隊」を送り込んで、たがいに武闘するようになる。東大全共闘の行動もゲバルト化し、東大闘争を象徴する安田講堂での国家権力との物理的な攻防に行きついた。

【資料】 日本民族学会における万国博・民族学博物館設立反対のビラ（一部抜粋）  
春の研究大会に全国より参集された研究者諸君に訴える

我々は今日の社会状況・そこにおける自己の存立基盤を認識するとき、執拗な不安にかられないではない。それは研究大会や日々の研究活動という一見平穩無事な日常性の下に、学界の全体をも呑み込んで押し流すとうとうたる流れをみる事ができるからである。

たとえば来年開催される万国博覧会のための、民族資料収集は、我々の反対表明にもかかわらず遂に実施に移され、これに動員された人類学者は世界各地に嬉々として飛びたつた。（中略）我々の指摘したい事実とは万博協力ばかりではない。万博協力でうちかためた政財界との結合を基盤にして、国立民族学研究所博物館の実現が日程にのぼり始めている。この研究大会でも趣旨説明されようとしているこの博物館は、博物館のstereotypeを打ち破るものではあろう。民族資料の収集・研究・保存・展示という19世紀的イメージによってかつて、世界諸民族に関する情報センター、更には世界各地に派遣される人間を教育する、研修所、として機能するという、応用人類学的観点を前面に出した施設として計画されている。

戦後斯学は日本民族学協会や幾つかの大学での講座を中心に、純アカデミックな活動として再出発したが、アジア経済研究所、京大東南アジア研究センター、東外大アジア・アフリカ言語文化研究所等々、研究施設の整備の度毎にその方向転換の度を強めている。そして東大では学部再編の一環として社会学部が構想され、その中には、社会開発学学科の一講座として応用人類学がくみこまれているのである。このように脈絡の中で見るならば、万博協力や国立博

する姿勢、さらに、貧困な研究環境にある院生に教官が「現地調査の機会」を与えて、教官の院生に対する権威を示すという師弟関係の在り方を批判して、文人闘争委は万博協力反対を訴えた。

翌六九年五月、日本民族学会の研究大会で、国立民族学研究所博物館の設立構想が説明され（担当は祖父江孝男先生だった）、文人闘争委は反対を表明した。これは万博協力と二連の産学協同の計画であり、時勢に擦り寄って人類学の利益を図ろうとする姿勢は、戦時期に国策への貢献を掲げて国立の民族研究所を立ち得た歴史と重なる。わたしの得ていた資料では、博物館は総合的な「地域・民族別資料センター」で、「応用人類学的な役割」も兼ね、「低開発諸国の現地へ赴任（中略）する外交官や商社出張所員（中略）のために『研修所』として」機能すると謳っていた。

# 大阪万国博覧会とハンパク運動

山路勝彦 関西学院大学名誉教授

よく知られているように、大阪万国博覧会の基本的理念は「人類の進歩と調和」という「統一テーマ」にあらわれている。その理念は各方面からの有識者、赤堀四郎、井深大、大原總一郎、大佛次郎、大来佐武郎、茅誠司、貝塚茂樹、桑原武夫、駒村寅正、曾野綾子、丹下健三、東畑精一、豊田雅孝、松方三郎、松本重治、村山リウ、湯川秀樹、武者小路実篤が「テーマ委員」として議論を闘わせた産物であった。この理念を具体化するため、さらに専門家によ

つい最近のことだが、民博の現職の教員から、民博設立に反対運動があったとは知らなかったと聞いて、とても驚いた。民博設立、組織作り、そして展示品収集とその展示に尽力された祖父江先生が、『民博通信』（No.24 1984, No.94 2001）に書かれた回想で触れておられるが、館内での伝承は途切れていたようで、五〇年の時の長さを実感させられた。わたしは民博設立の一七年後に民博に転任し、九年間在任した。その間、民博に「応用人類学的な役割」の要素はなかったと理解している。文人闘争で民博設立構想に反対したこと、後年に民博に勤めたこと、そのいづれもわたしの自己認識に欠かせない要素である。民博設立構想反対運動を民博の歴史にしっかりと刻んでおきたい。

る「サブ・テーマ専門調査委員会」が設けられ、赤堀四郎、石谷清幹、梅棹忠夫、桑原武夫、小松左京、林雄二郎らが委員となり、「より豊かな生命の充実を」、「よりのり多い自然の利用を」、「より好ましい生活の設計を」、「より深い相互の理解を」の四項目がサブ・テーマとして選ばれた。六〇年代は激動の時代であった。とりわけ、ベトナム戦争をめぐって反戦運動が高まり、作家の小田実らが積極的に「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民

連合）を組織し、日米安全保障条約の継続に抗議して、一九六九年に機関誌『週刊アンボ』を発行した。ベ平連の活動に呼応し、進歩派を自認する建築家、哲学者、評論家は高度成長期の日本産業を疑問視する発言を繰り返して、同年には哲学者の山田宗睦を中心に「ハンパク（反博）協会」を結成する。その主張は、「人民不在の『大國主義と商業ナショナリズム』の祭典」と断じ、万国博覧会を否定することにあった。「ハンパクニュース」四号（一九六九年八月七日）は、第一に大量の税金投入は独占資本家を肥やすことになる、第二に万国博ムードを盛り上げ反安保勢力に対抗しようとしている、第三に技術万能、物質万能主義を徹底し、「沖繩」「安保」「ベトナム」を抱える矛盾を隠蔽する政治工作である、と三つの理由を挙げて批判し、万国博の基本理念とサブ・テーマに対抗するスローガンを掲げた。

## 学生とハンパク運動

この一連の思潮は東京大学大学院文化人類学教室にもおよんでいた。その教室に属す全共闘の院生は、



『週刊アンボ』に掲載された風刺画（出典：『週刊アンボ』11号、9頁、1970年4月6日）

資本主義体制の一翼を担うイベントとしての万国博覧会に反対し、世界の諸民族の民具や仮面の収集事業に異議を唱えていた。民具収集は後に設立されることになる国立民族学博物館と深くかかわっている。万国博反対は民族学博物館設立への反対表明でもあった。この民具収集は、「ナマハゲ」などの祭りを取り入れたらという評論家の村山リウの発言にヒントを得て、岡本太郎が泉靖一に相談したところから出発している。泉は梅棹と連絡をとり、こうして実現したのが日本万国博覧会世界民族資料調査収集団（EEM）であり、梅棹は仮面や民具の収集のため世界各地に若手人類学者を赴かせたのであった。

東大文化人類学教室の全共闘はその営為を帝国主義への加担とみて批判し、一九六九年春、東海大学での日本民族学会総会で問いただした。だが、この議論に強く反発したのは梅棹忠夫であった。梅棹は万国博反対、民族学博物館設立反対の論者に対して、万国博開催が情報産業時代の到来を告げる祭典であるのに、それを理解できず「歴史を逆にまわそう」としている「反動ども」と一刀両断で切り捨てる。万国博終了後、その跡地利用をめぐる梅棹は積極的に民族学博物館設立へ向



「ハンパクニュース」4号（1969年8月7日）  
「ハンパク」運動は「反戦のための万国博覧会」をスローガンとし、テーマに「人類の平和と解放のために！」を掲げていた。さらに「サブテーマ」として四項目が謳われている。これらは、万国博覧会の基本理念に対する裏返しの表現であって、安直な印象を与えている

けて活動していくのであって、その経過は今ではよく知られている。  
**時代が求める議論**  
じつをいえば、テーマ委員会に出席を求められた際の梅棹の発言には問題点が指摘される。大原總一郎（倉敷レヨン社長）、大来佐武郎（日本経済研究センター理事長）などは環境問題をもち出し、厳しく梅棹を批判している。その点は梅棹の反省課題になろうが、この時代に必要な議論は、市民社会にとって魅力ある「産学協同」とは何か、考えることであった。マルクス主義もしくは左派的イデオロギーに浸潤され、産官学協同を忌避していた時代精神は立ち遅れていたといわざるをえない。六〇〇万人という多数が万国博会場を訪れ、熱狂した事実を説明できないことにハンパク運動の弱点があった。ハンパク運動の掲げた目的はあまりにも虚無的である。体制批判のイデオロギーに立てば世界が読みとれるという虚像に執着し、俗受けする大言壮語を並列しただけの荒さと軽さが、その運動には目立つのである。

物館の設立が決して孤立した出来事でないことは明らかである。人類学の研究体制は、斯学の発展によって新たな施設を必要とする度毎に、体制の中に一層くみこまれる形で編成されてきたのであり、現にされつつあるのだ。人類学における産学協同の更なる進展！  
人類史をひもとくならば、斯学と体制との関係は正に「do or die」である。日本もまた決して例外ではない。しかも、戦後再出発する時に、日本の人類学者は戦時中の苦がるべき経験を深刻に反省することなく過してしまっただけ。そして今また同じ「敵」を踏みつゝある。我々は、万博に協力した人類学者に対しては、彼らの無自覚的・無節操を糾弾して行くであろう。そして諸君をも「万博協力のような目に見える個別的出来事としての産学協同には手を貸していないが、しかし日常的な人類学的研究は、学問の自由の名の下に行っている諸君をも別の意味でやはり糾弾する。（中略）  
我々は万人に開かれた、自由な、そして全体的な研究を欲する。さらには、我々の研究が我々のかゝる意図と離れて利用されることに反対する。我々は万博協力、国立民族学研究所博物館設立、産学協同に基ずく「つく」研究体制改編の進展に断固反対し、それらの担い手の責任を追求「及」して行くであろう。（中略）  
昭和44年5月10日  
民族学博物館構想 反対！  
万国博覧会粉砕！  
中教審―反動的大学立法粉砕！  
東大斗争勝利！  
東大大学院社会学研究科  
文化人類学コース斗争委員会  
（自費出版、二〇〇六年）  
出典：清水昭俊「これまでの仕事、これからの仕事」（自費出版、二〇〇六年）

# 半世紀後からみた全共闘・探検部

小林 茂 こばやし しげる 大阪大学名誉教授、大阪観光大学教授

一九六八年当時私は大学生で、翌一九六九年、七〇年へと全共闘運動を体験するとともに、その影響を受けて解散しようとした学生サークル（探検部）の議論に参加した。

今から考えれば、私の見た京大の全共闘は多様な学生の集まりで、大学側への抗議という点で一致していたが、組織や要求内容も学部ごとに特色があった。全体として敗北に終わったとはいえ、「象

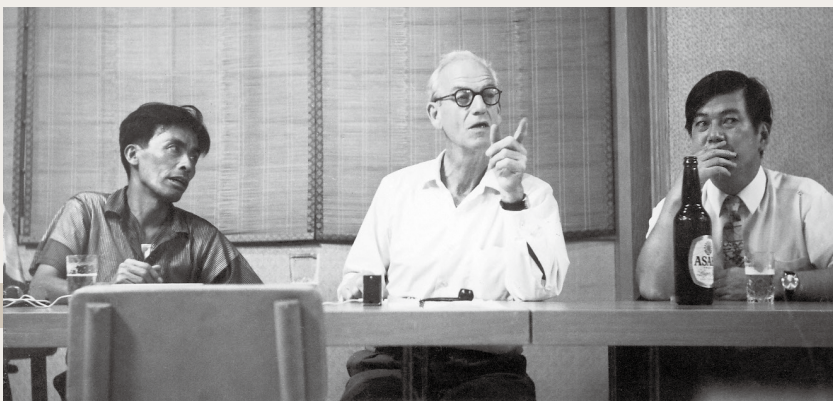


アンデス調査隊の栽培植物調査班(写真提供: 渡辺信、ポリビア、コチャパンバ付近で、1968年12月下旬)左から、山本紀夫(農学部学生)、田中正武(農学部助教授、隊長)、川上嘉通(日本専売公社)、渡辺信(農学部学生)。渡辺は紀行文で、高度2500メートルのコチャパンバ付近では高度差が大きく多様な農作物が見られることに加え、そこを離れて最初に宿泊した集落が1年半前にゲバラのゲリラ隊に一時期占領されたことに触れている

牙の塔」という大学のイメージを大きく変え、不当なことがあれば学生にも抗議行動が可能なることを示し、また教授を頂点とする講座制を大きく動揺させた。

## 探検部をめぐる議論

他方探検部では、一九六八年秋にアンデスへ氷河調査と栽培植物調査のふたつの隊を送り出しながらも、一九六九年七月になると、全共闘を無視して探検部は好きなことをやっているとか、探検はそもそも体制的だという批判が内部から出て、部室の封鎖、さらには解散が主張されることになった。一九七〇年五月におこなわれたこれをふりかえる座談会(『探検』二二号、一九七〇年)は探検部存続派がおこなったもので、東大探検部の解散やOBのジャーナリスト、本多勝一さんの探検批判・人類学批判など議論は多岐に



コーナー教授歓迎会(京都、百万遍の材料学会の建物で、1966年夏)ケンブリッジ大学にも探検部があり、その部長のE.J.H.コーナー教授(植物学・菌類学、中央)が来られたので歓迎会があり、探検部の学生にもお呼びがかかった。左側は京大探検部長の四手井綱農農学部教授、右側は梅棹忠夫人文学部研究所助教授。当時は自然科学から文化人類学まで、広い学問分野に共通する手法としてフィールドワークが考えられていた

わたった。ただし、稚拙ながら重要な論点をカバーし、解散派の議論の明快さを認めながらも、フォーマルな学部教育に飽き足らない学生たちが、自分たちで立案し実施できるフィールドワークの拠点として探検部を考えようとした。

## フィールドワークの可能性

ところで、当時の京大には文化人類学を教育する部門がなく、今西錦司氏や梅棹忠夫氏の組織した京都大学人類学研究会が関心をもつ学生と教員の発表と討論の場となっていた。抑圧的な講座制を離れて多様な議論が許されていたことも魅力で、参加者には民博の教員になった人も少なくない。このころの発表で大きな影響があったのは、上記の本多さんの探検批判・人類学批判で(「調査される者の眼」一九七〇年参照)、権力や財力を背景とした調査する側に対して、調査される側は彼らに意味づけられる対象になるという非対称な関係の問題点を指摘した。

文化人類学者の山口昌男やまぐちまさおさんはこれに即座に反論したが(「調査する者の眼——人類学批判の批判」一九七〇年)、自己防衛的で的外れなものだった。しかし海外から始まった調査する側とされる側の関係を重視する文化人類学批判はその後日本に波及し、

この深刻な影響は今も続いている。他方この半世紀間、フィールドワークは多彩な学問分野、報道などで必要な作業であることが広く理解されるようになった。私自身もネパールでマリアの疫学的調査を組織し、いろいろな体験した。今

回半世紀前の探検部封鎖やその後の人類学批判をながめ、フィールドワークについては文化人類学に視野を限らず、さまざまな課題をもっと広い立場で検討する必要性を感じた。もとより解決は容易でないが、おもしろい論点が出てきそうである。

# 直接民主主義の実験と大学創造運動

荒川 章二 あらかわ しょうじ 国立歴史民俗博物館名誉教授

企画展示「一九六八年」国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)では、二〇一七年度企画展示『一九六八年』——無数の問いの



図1: 全共闘運動にかかわる企画展示「1968年」展示風景(図1~3撮影: 国立歴史民俗博物館管理部博物館事業課 勝田徹)

噴出の時代——を実施した。一般に「一九六八年」として含意される社会運動では、全共闘や新左翼に代表される学生運動が核であり、ときにベ平連などの反戦市民運動がイメージに付加されるが、同時期に展開された三里塚闘争や水俣病闘争、住民運動との共通性を踏まえて個々の特徴が総合的に検討されることはほとんどない。グローバルな社会運動高揚の一環として語られてきたにもかかわらず、日本の「一九六八年」の実態に関する理解は各人各様であり、全共闘運動とは何であったのかについては一層漠然としている。

この状況に対し、企画展示では、一九六八年前後に高揚期を迎えた多様な社会運動のうち、「個」(あるいは小集団)の主体性(自己決定と行動化)を重視する運動が同時多発的にあらわれることに注目して、この観点で括ることができる当時の社会運動を「一九六八年」社会運動として定義し、全共闘運動といくつかの主要な社会運動を併せて取り上げた。図3からは、日大闘争と東大闘争との連携、三里塚闘争

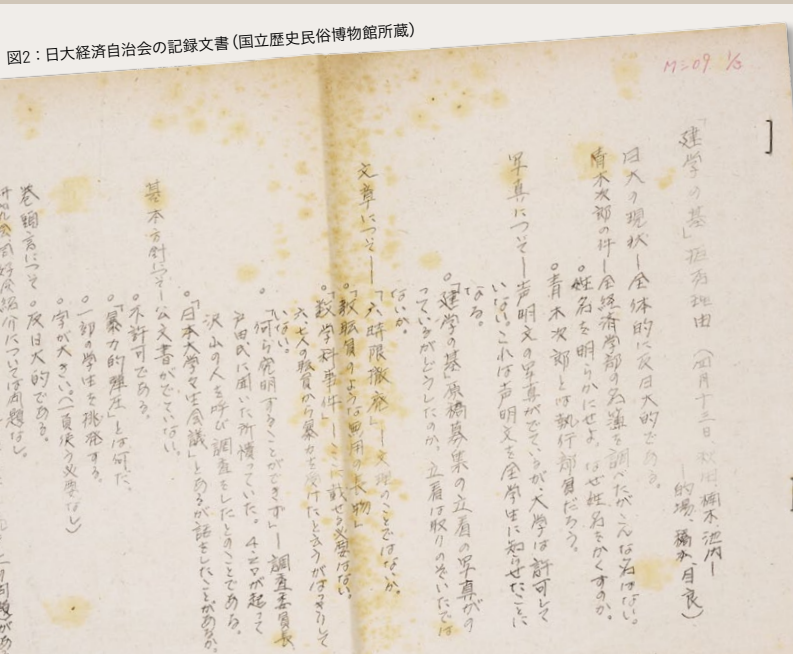


図2: 日大経済自治会の記録文書(国立歴史民俗博物館所蔵)

やべ平連運動との関係性が見える。展示では、べ平連が主要な活動舞台とした新宿という都市空間のなかで、日大全共闘が市民に支持を訴えている様子がうかがえるイラスト地図などを提示した。

### 全共闘運動

本特集の主題にかかわる全共闘運動についての展示は、図1の様に、東大と日大を中心とし、その広がりとして各大学や教員層への影響を含めた設計とした。特に、もつとも全共闘的といわれる日大の運動像はほとんど解明されておらず、当事者から歴博に寄贈された資料を整理しつつ、展示を模索した。日大闘争の発端は、巨額の使途不明金問題の発覚であるが、学生たちが重視したのは、図2のように、新入生歓迎のような学生の活動にさえ、「反日大的」として抑圧を図る大学の姿勢に対する民主化要求であり、全共闘はその抑圧的性格を復古ではなく、高度成長政策に適合的な大学経営モデルとして位置付けた。

全共闘運動は、決起集会や大衆団交、バリケード封鎖と機動隊との衝突などの集団・集合イメージ

## 学生運動から水俣病闘争へ

### 水俣病を告発する会

一九六九年、被害者家族が熊本地裁に提訴し、水俣病闘争がはじまった。「水俣病を告発する会」は、



水俣病歴史考証館に展示されている水俣病闘争のシンボル「怨旗」(2015年)

被害者はろくな補償も受けられずに、地域において孤立していた。

告発する会の原点は明快である。自らの利益のために企業が何の落ち度もない人びとを殺した。何もしないではいられない。家族が思いを晴らそうとする闘争を全力で支援しよう。これである。告発する会ではこれを「惻隠の情」「義によって助太刀いたす」などと表現した。従来の左翼運動とは異質な心情的ないし倫理的な基盤が彼らの運動にあった。

彼らの運動スタイルはかなりユニークなものだった。参加は自由で、会員登録や規約に当たるものはない。集まった者が会員である。思想的にはかなりの幅を含む無党派で、東京、仙台、名古屋、京都、福岡など、全国に同名の会が多く結成されたが、それぞれ独自に行動した。

### 学生運動の残り火

告発する会の中心メンバーは、当時三〇代から四〇代の「大人たち」だったが、デモや座り込み、募

が強いが、日大の基盤組織は学年・学科・クラス・サークルなどの自律的な小組織であり、それぞれの組織での徹底した議論に基づく合意を重視した闘争委員会を結成し、個々に総括・方針書をまとめ、小さな機関紙誌を発行し、自主ゼミを組織した。「全学共闘会議」とは、自律的小単位を結ぶ柔軟な共闘であり、学部や全学的合意は、代議制ではなく、数千人の学生が集まった大衆集会で形成された。

### 「個」の回復

全共闘といえば「自己否定」「大学解体」を想起する。しかし、日大闘争は、抑圧的管理体制のなかで自己を主張し、それを通じて「自己肯定」する闘いであった。各大学全共闘間の性格の違いは、「全共闘」の定義を難しく見せるが、個々の立脚点から大学における学問研究のあり方を問い、振り返って

その闘争を支援する組織として熊本で結成された。

水俣病は、いわずと知れた日本最大の公害病のひとつである。工場から排出されたメチル水銀による



エコパーク水俣での石仏(魂石)の案内(2015年)

金活動などで主力となったのは二〇歳前後の若者たちだった。学生運動の経験者で、どちらかというが遅れて参加した、あるいは不完全燃焼だった者たちが多かった。体制の厚い壁の前に挫折を余儀なくされた後、石牟礼道子の『苦海浄土』や土本典昭の記録映画、宇井純の東大自主講座などに触発され、一部が水俣病闘争へ流れてきたのだ。それゆえ彼らの運動スタイルに学生運動の影響が見られたとしても不思議はない。

他にも種々の理由があったにせよ、水俣病闘争が一九六九年から一九七三年にかけて国家の土台を揺るがすような大きな力をもつことができたのは、学生運動の残り火があったことによると思う。裁判支

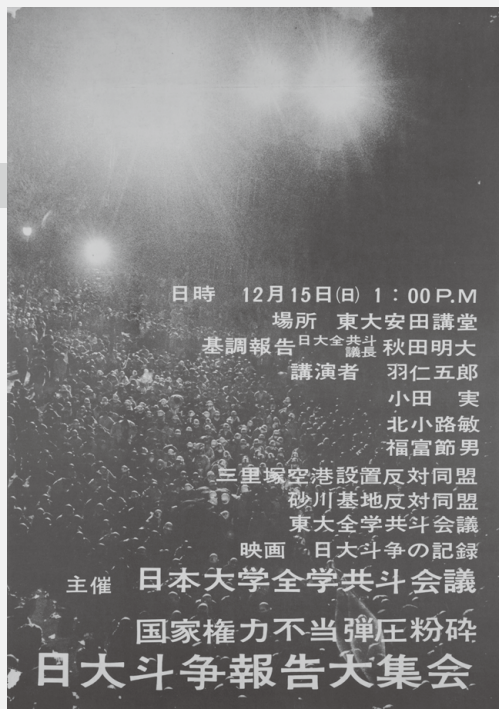


図3: 1968年12月15日、東大安田講堂での日大闘争報告集会ポスター(国立歴史民俗博物館所蔵)

自己形成過程を自問する、こうした問題意識は共通であった。日大闘争では「反大学」と銘打って、さまざまな自主カリキュラムを運営し、既成の学問への批判とあらたな学問・教育体系の創造を目指した。わたしたちは、既成の全共闘イメージにとらわれることなくその批判と創造の精神を掬い上げていく必要がある。

被害は、一九五〇年代にはすでに発生していた。しかし一九六八年まで政府が原因の特定を避けたため、排水は止められずに被害が拡大し続けた。その間、

援、厚生省占拠、チソソ本社座り込み、一株運動といった直接行動は社会に大きなインパクトを与え、一次訴訟勝訴や補償協定書締結などに結実していった。

### 現在の水俣病運動

あれから半世紀が経った今も、水俣ではまた運動が続いている。補償を求める運動が一部に残る一方で、水俣病を伝えることによって水俣病が二度と起きない社会を実現しようとする運動が主流になっている。そしてその中心には、いまだ一九六八年の学生たちがいる。

わたしはこの二三年ほど水俣に通って彼らの「文化」を調査してきた。この世代には、他の世代にない運動文化があるとわたしは考えている。例えばそれは、社会は自分たちで変えられるという信念や、それを実行に移す行動力などだ。

学生たちはすでに七〇歳前後になり、運動の第一線から退こうとしている。その前に、わたしはもう少しこの文化について調べてみたいと思っている。



小学校教員向け水俣病啓発活動(2018年)

## いのししのかたち

丹羽 典生

民博 超域フィールド科学研究部



### 世界のいのししを集めてみました

展示資料を選定している筆者（右）

毎年、みんぱくでは年末年始に干支にちなんだ展示イベントが開催される。目下、その準備に追われているメンバーのなかに、探究心がくすぐられるいのししのキバの渦巻くかたちに魅せられた筆者の姿があった。

かにはいのししのキバをたわめて丸いかたちにしたものも含まれている。直接的いのししのキバの装飾品が日常的に身にまといられている場面を目にしたことはないし、それらが儀礼で使われている場に出くわしたこともない。ただ自分がオセアニア地域の研究を生業としていることとあわせて、いのししのキバを装飾品として使用することに関心はあった。なに



①いのししの牙 [バヌアツ、H0137666] ②釣針 [サモア、H0145927] ③履物(農作業用) [三重県 伊賀上野市、H0035900] ④帽子 [インド、H0109185] ⑤装身具(婚資) [バブアニューギニア、H0124018] ⑥土鈴 [岐阜県 高山市、H0142006] (左)と [大阪府 羽曳野市 誉田八幡宮、H0142414] (右)

毎年恒例の干支展の開催に向けて、実行委員会は展示プランを今鋭意作成中である。来年の干支はいのしし。そこまずは本館の収蔵庫を探り、いのししにかかわる標本資料を総覧することからはじめた。厳密に言えばいのししとブタは違うが、今回の展示では、ひろく「ブタ」もいのししとしてとらえることにした。

#### 実用品と装飾品

本館の収蔵資料のなかでいのししとかかわりのある資料は、全部で九三五件あった。皮、骨、尻尾、キバなどいのししの体の一部が素材として使われているものから、その顔や体の形象のイメージだけが使われているものまでさまざまである。前者のタイプには、釣り針、靴、盾、楽器、スプーンなど実用品もある。しかし大半を占めるのは、キバを使った装飾品である。後者はというと、いのししの人形や図案である。キバから体のかたちに至るまで、人びとはいのししに魅せられてきたのかもしれない。日本で作られている土鈴や絵馬には、見た目も楽しくかわいらしい造形のいのししの姿が見られる。もちろんそれ以外の国や地域の人形や仮面も含まれている。



バブアニューギニアの装飾品。鼻飾りなどに注目 (1974年撮影) [X0327713]

このような標本資料の全体の構成も意識しつつ、今回の干支展は、キバから作られた装飾品を目玉のひとつとして並べることにした。わたしが調査でかかわっているオセアニア地域では、サメやクジラの歯などを首飾りにする工芸品が知られているが、そのな

しろバヌアツ共和国の国旗には、いのししのキバが登場するくらいなのだ。他の国ばかりではなく日本でも時代をさかのぼれば、縄文時代の遺跡からはいのししの土人形やキバから作られた装飾品が発掘されているという。また実際に使用している雰囲気から推測するように一九七四年にバブアニューギニアで撮影された写真と上記のバヌアツ共和国の国旗を壁面に掲げる。

もちろんいのししの人形や絵にも多くスペースをとってあることはいうまでもない。「めぐる」のセクションでは、日本の土鈴や絵馬と世界のいのししの人形などにわけて並べる予定である。かざったり、めだたり、両方をあわせてみることで人間がいのししのかたちをどのように認識して、形象化しているのか、みなさんの目で楽しんで頂ければ幸いである。

#### くまのくま

キバというと敵を突き刺すためにまっすぐで飛び出しているイメージがあるかもしれない。ところが装飾品として使われているキバには、ぐるぐる渦を巻いているものが多い。同僚でいのししについての専門家でもある野林厚志教授によると、キバは自然に湾曲するのではなく、いのししが生きているあいだに人為的に力を加えて、たわめることで渦を巻くという。オセアニア以外の地域の標本資料からも渦を巻いたキバが出てくるのを見るにつけて、人間のこの形象への普遍的な関心について考えたい。

このように標本資料に魅せられて展示の準備が脇道にそれたりしながらも、一二月の開幕に向けて怒涛の日々が続いている。とはいいつつ閉幕は一月半ば。打ち上げはやはり季節的に牡丹鍋にしようかと考えている。

企画展

「アーミッシュ・キルトを訪ねて―そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」  
無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりませう。



無地の女兒用ワンピース

■関連イベント  
ギャラリートーク  
日時 12月20日(木) 14時～  
講師 鈴木七美(本館教授)  
会場 本館企画展示場  
※申込不要、要展示観覧券

企画展  
「旅する楽器―南アジア、弦の響き」  
南アジアの弦楽器は、中央アジアや西アジアから伝えられた楽器が改良され定着したものが多く、そのいくつかは南アジアでの変容を経て東南アジア、東アジアにも伝えられてきました。楽器が広大な地域を旅して伝播していく様子を、ユーラシアにおける長期的な文化交流を体験してください。



シーク教徒が演奏する擦弦楽器タウス

■年末年始展示イベント  
「いのしし」  
2019年の干支である「いのしし」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「いのしし」を紹介します。

会期 12月6日(木)  
～2019年1月22日(火)  
会場 本館ナビひろば



仮面(ペルー)

■関連イベント  
ワークショップ  
「かざってボン!へんしんいのしし」  
世界中の人びとが、いのししの牙をつかってからだをかざっています。きみなら、どんな風にかざるかさるかな? スタンプや色えんぴつなどをつかって絵を描くワークショップです。

日時 12月9日(日)、1月14日(月・祝)  
各日10時～17時(16時30分受付終了)  
会場 本館エントランスホール  
※当日随時受付、先着200名、参加無料(ただし、本館展示場をご覧になる場合は、展示観覧券が必要です。)  
※未就学児は保護者同伴でご参加ください。

みんなくミュージアムパートナーズ  
「干支の亥(いのしし)で絵馬を作ろう」  
本館展示場にある「いのしし」をスケッチするワークショップです。

日時 1月13日(日)10時30分～17時  
(15時30分受付終了)  
受付場所 本館エントランスホール  
※当日随時受付、先着80名、参加無料(要展示観覧券)  
※参加対象者3歳以上、未就学児は保護者同伴でご参加ください。

みんなくミュージアムパートナーズ  
「おりがみて遊ぼう!干支シリーズ(亥)」  
おりがみて干支の「いのしし」を折るワークショップです。

日時 1月14日(月・祝)10時30分～11時、11時～11時30分、11時30分～12時、13時～13時30分、13時30分～14時、14時～14時30分  
(各回20～30分程度)  
会場 本館エントランスホール  
※当日受付、各回先着10名、参加無料  
※参加対象者5歳以上

みんなく映画会 第44回ワールドシネマ「ママのお客」  
涙あり笑いありのイラン映画の名作を上映。食卓をとおして、イランの人びと、その日常生活や社会を知りたいと思います。映画の詳細は、本号18～19ページの「シネ倶楽部M」をご参照ください。  
日時 2月23日(土)13時30分～16時30分(13時開場)  
会場 ホテル阪急エクスパーク 多目的ホール(オービットホール)  
(定員400名)  
※申込不要、参加無料  
※参加券を当日11時から多目的ホール(オービットホール)前受付にて配布

みんなく映画会 みんなく映像民族誌シアター  
本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。  
会場 淀川文化創造館 シアターセブン(定員60名)  
司会 福岡正太(本館准教授)  
※申込不要、参加無料

「カラハリ砂漠の狩猟採集民」  
日時 1月12日(土)14時～16時(13時30分開場)  
解説 池谷和信(本館教授)  
「ネパールの30年」  
日時 1月26日(土)14時～16時(13時30分開場)  
解説 南真木人(本館准教授)

みんなくゼミナール

日時 12月15日(土)13時30分～15時(13時開場)  
会場 特別展示館  
参加費 無料  
第486回

毛沢東バッジの過去と現在  
講師 韓敏(本館教授)

毛沢東の肖像が入ったバッジの出現は、1940年代に遡ることが出来ます。現在、目にするバッジは、主に1960年代後半に中国各地で集中的に製造されたものです。当時、バッジは、人びとの胸につけられ、スタンダードなファッションとして定着し、イベント、儀式や写真撮影の時に不可欠な必需品でした。バッジの関係者の語りをお聴きし、時代の装飾品の系譜とその意味の変化を追ってみます。



観光地や骨董品店で流通しているバッジ(瀋陽、2003年)

みんなくワークショップ・サロン  
研究者(話者)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。  
12月2日(日)14時30分～15時 本館第7セミナー室  
ポリビア・アマンンの旅  
話者 齋藤晃(本館教授)

12月9日(日)14時30分～15時15分 本館第4セミナー室  
声の力―新聞連載を通じて考えたこと  
話者 広瀬浩一郎(本館准教授)

12月16日(日)14時30分～15時15分 アフリカ展示場  
ザンビア、チエワの村での暮らし  
話者 吉田憲司(本館館長)

※12月23日(日・祝)のワークショップ・サロンはお休みです。  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)  
ただし、2日(日)、9日(日)は展示観覧券不要

みんなくミュージアムパートナーズ  
「点字体験ワークショップ」  
目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション! 点字体験ワークショップを開催します。  
日時 12月8日(土) 12時～15時30分  
会場 本館エントランスホール  
※申込不要、参加無料

巡回展  
「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザイン―の原点と現在」  
会期 12月6日(木)～19日(水)  
会場 静岡文化芸術大学  
西ギヤラリー、中央ホール、総合演習室  
静岡県浜松市中央区中央2-1-1  
開館時間 平日 10時30分～17時  
土・日 10時～18時  
主催 静岡文化芸術大学、国立民族学博物館  
共同企画 東北歴史博物館

●休館日のお知らせ  
年末年始は12月28日(金)から1月4日(金)まで休館します。年始は1月5日(土)から開館します。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/ E-mail minpaku@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)  
※会員無料(会員証提示)、一般500円

第484回 2019年1月5日(土)13時30分～14時40分  
南の島の贈りもの、民博からのお返し  
―研究成果の現地還元とは―  
講師 須藤健一(堺市博物館館長、本館名誉教授)

人類学者は自身の好奇心と学的関心から飛んでフィールドワークをおこないます。これが現地の人びとの好意に甘えて衣食住をともにし、こぼれや生き方や世界観などを知るための調査方法です。有形無形の文化財も収集します。調査で学んだ貴重な情報や知識や技術や造形は、研究の源となり、博物館の「お宝」です。一方、それは現地の人びとにとってどんな意味や価値があるのでしょうか。人類学者と被調査者とのかわりについて再考します。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

第485回 2019年2月2日(土)13時30分～14時40分  
アンデスの箱型祭壇が伝えるもの  
―農村の生活から歴史記憶まで―  
講師 八木百合子(本館助教)

東京講演会  
第124回 12月8日(土)13時30分～14時40分  
野次から応援へ―応援の比較文化論の試みから  
講師 丹羽典生(本館准教授)  
会場 モンベル御徒町店4Fサロン  
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。  
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円

第80回体験セミナー  
長崎県、潜伏キリシタンの足跡を訪ねる  
―生月島、平戸島、上五島を訪ねる―  
日程 2019年2月22日(金)～25日(月)  
【申込締切:1月11日(金)】





想像界の生物相

## メキシコ仮面に見る クリーチャーたち(2) ——テロロアパンの悪魔

ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長  
アンソニー・シェルトン



資料名 | 悪魔仮面

標本番号 | H0144463

地域 | メキシコ

サイズ | 高さ 69cm

資料名 | 悪魔仮面

標本番号 | H0108389

地域 | メキシコ

サイズ | 高さ 51cm

### ◆◆善と悪のはざま◆◆

メキシコにおける悪魔は、境界的で、どっちつかずな存在である。初期のキリスト教宣教師たちはメキシコ土着の神々を、聖書の墮天使とギリシア古典に登場する怪物たちのイメージが融合したような「悪魔的」な存在としてとらえた。反対にメキシコの先住民たちは、贖罪と神の許しを必要とした悪魔の使いと見なされた屈辱的な立場を決して受け入れず、逆にスペイン人の侵略者たちの不道徳と悪行を、地元で語り継がれてきた善と悪の戦いの物語のなかに位置づけた。メキシコやアンデス地方の一部の地域では、捧げものをしてまつれば、悪魔は先住民の味方となり、貴重な鉱物の発見、豊作、富などをもたらすとさえ考えられた。

### ◆◆悪魔仮面コンテスト◆◆

この曖昧性は、ゲレロ州にあるメステイーン(混血)の町、テロロアパンで作られる悪魔仮面にもよく表れている。

テロロアパンにおける悪魔仮面の使用は、幾度か流行り廃りを繰り返してきたが、一九七〇年代には悪魔仮面作りが復活し、誰がもつとも恐ろしい仮面を創作し、もつとも効果的に鞭の破裂音をたてることができるといわれるコンテストも、九月一六日のメキシコ独立記念日の祝祭にあわせておこなわれるようになった。このコンテストは、次のような歴史的背景から由来するといわれている。

テロロアパン周囲の地域を副王軍の攻撃から守っていた反乱軍の戦士ペドロ・アセンシオ・アルキシラスの軍隊には、ホセ・アテナシオという、陽気で冗談好きな元ロバ追いがいた。アテナシオはそれまでもよく、ジャガーの皮に付けた悪魔仮面をかぶり、鞭を猛烈にふるって仲間を怖がらせてふざけることがあった。部下のこうした行動を知っていたペドロ・アセンシオは、一八二〇年三月に副王軍によって反乱軍が包囲された際、町に悪魔が徘徊しているという噂を流し、町の女たちに木材を集めさせ、悪魔仮面

を大量に制作した。そうして月のない夜、反乱兵たちは悪魔の恰好で、鞭をふるいながら、町中にあらわれた。悪魔の同時多発に震え上がった副王軍は、とり囲まれ、あつけなく降伏させられた。

### ◆◆ますます複雑怪奇◆◆

みんなく所蔵の二つの仮面は手の込んだ作りであるが、比較的早い時代のもので、イギリスのブライトン博物館にある仮面と同様に、おそらく一九七〇〜八〇年代の制作であろう。収集家の注目を集めるようになり、また仮面コンテストでの競争も激化したため、近年にはますます複雑怪奇な造形になってきている。カナダ、バンクーバーの人類学博物館にある六点などには、蛇の頭やさまざまな動物の角がたくさん付いており、八キログラム以上の重さがある。いずれもジャガーもしくはキツネの皮が付いており、一九世紀の牛追いが着た特徴的な長い革のコート、革手袋、ブーツとともにまとわれる。(翻訳・山中由里子)

# 新世紀ミュージアム

空手道は、今や日本だけではなく、世界中に愛好家をもつグローバル・スポーツへと発展した。そんな空手道のルーツや流派の多様性をわかりやすく紹介したのが沖縄空手会館資料室だ。五感を通じて空手道について学べる貴重な場所を訪ねてみた。



沖縄空手会館の外観

沖縄空手会館は昨年三月、沖縄県豊見城市にオープンした。空手道の競技場だけでなく、沖縄空手に関する図書室を併設した展示施設も開設されたことを知り、筆者は沖縄を訪れた。一連の身体動作から成り立っている空手道を、どのよ



資料室入り口のパネル。空手家の格言が並ぶ

うに展示することができるとか興味があったからである。空手は「素手」で戦うことを意味するが、沖縄空手は武器や鍛錬具を利用した稽古をおこなう流派もあり、形と組手の競技ルールも多様である。沖縄空手会館資料室では、空手特有の静と動の連続性をモノで表現しつつ、各流派が成立した歴史的経緯を通じて、

沖縄空手の伝統の多様性をわかりやすく説明している。

資料室の入り口では、右側に首里城、左側に空手道の開祖のモノクロ写真が迎え入れてくれる。首里城を背景として、松涛館流の開祖である船越義珍（一八六八―一九五七）の「空手に先手なし」に始まり、著名な空手家の格言とその英訳が並び、まさに空手道の哲学的エッセンスが詰まったパネルである。空手家にとっては開祖の等身大と思われる写真のパネルも非常に嬉しい展示だ。一般的に流通する写真はポートレートであるため、道着を着用して技を実践している姿を目にする機会は貴重である。

## 見て、聞いて、触れる空手

常設展示は三つのセクションにわかれている。壁面には琉球国時代から現在までの沖縄空手の歴史と武器や鍛錬具の使用方法が展示され、中央には鍛錬具等を体験するスペースが設けられている。

歴史セクションでは、中国や東南アジア諸国との交流があった琉球国のコスモポリタンな土壌で発祥した「手」とよば



体験コーナーの鍛錬鉄下駄。大人用は5キログラムで子ども用は2.5キログラム

が使い込まれた様子や汗の染みなどを確認することができる。また、重そうな鈍石や鉄下駄を自由自在に操る様子は写真からも伝わってくる。

最後に「沖縄空手の体験コーナー」では、握巻や鉄下駄といった鍛錬具を持ち上げたり、名人が繰り出す技の速さを感じたりすることができる。五キログラムの鉄下駄に足を入れてみると、歩くことすらままならず、軽々と蹴り上げる年配の師範への敬意がより一層深まる。

「沖縄空手流派企画展——上地流・剛柔流」は、両流派の歴史や形について詳述している。空手道の流派の成立や発展が、身体能力に優れているだけでなく、人格的に魅力のある人物の営為に立脚していることが強調されている。カリスマを展示するのは、身体動作を展示するのと同様に難しい。本企画展では、師範の等身大パネルはもちろんのこと、日常会話の音声データを視聴したり、両流派を代表する師範の手形と足形に触れたりすることで、五感を通じて空手

## 沖縄から世界の格闘技へ

二〇二〇年東京五輪から公式競技となることを示すように、空手道が琉球王朝エリート（の）の武術から、世界中の空手家が日々汗を流し鍛錬に励む格闘技に変貌して久しい。沖縄空手会館資料室からは、グローバル・スポーツとなった空手道のルーツが沖縄にあることを、文献史料や展示資料を通じて示す、沖縄空手家や行政の営為が伝わってくる。筆者は、本展示を通じて、琉球国から始まる沖縄の歴史と空手道が驚くほどに密接に結びついていることが鮮明にイメージできた。



巻き藁（わら）や瓦割りといった稽古風景を描いた最古の挿絵、「南島雑話」（1850年代）

家の人となり迫る工



イラン人の人づきあいの機微を知る

藤元 優子  
大阪大学教授

大物監督の人情コメディ

「ママのお客」は、イランの著名な児童文学作家フーシャング・モラーディー・ケルマーニーの原作を元に、ダリーウシュ・メヘルジュイが制作・監督した大ヒット作である。メヘルジュイは、イラン社会を象徴的に描いた「牛」（一九九九年）でヴェネツィア国際映画祭をはじめとする国際映画祭で受賞して一躍有名になった、イラン・ニューウェーブ映画を代表する監督である。イラン社会への

批判や風刺を込めたインテリ好みの作風で知られるが、本作は監督が初めてラジオ・テレビ局とタイアップして撮った万人に愛される人情コメディで、イランのフェアジユル国際映画祭で作品賞を受賞した。



願掛け行事のごちそう作り(撮影：羽田美希、シーラズ、2005年)

下町に生きる人びとの心意気

舞台は民家が建て込んだテヘランの下町。薬物依存や家庭内暴力、戦争難民など、さまざまな問題を抱える複数の家族が古屋をシェアしている。その夫婦と子ども二人の一家に新婚の甥夫婦が訪ねて来ることになり、お母さんは途方に暮れる。夫に何カ月も給料が入らず、今日の暮らしにも困っているのだ。甥夫婦に良いところを見せたいのに、お茶すらまともに出せそうにない。そこで、家族だけでなく、隣人たちを総動員したおもてなし作戦が始まり、すったもんだの末、ようやくすばらしい料理ができあがって楽しい宴会になる。お母さんがストレスで倒れるというハプニングも事なきを得て、長い一日が終わる。重い社会問題も織り込まれてはいるものの、人は貧しくとも寄り添い合い、助け合えばどんな困難でも乗り越えられるものだというメッセージが込められたハッピーエンドに心なごむ秀作である。

日本に似たイランの人情

家族単位で互いの家を訪問し合うことの多いイラン人にとって、おもてなしは人づきあいの基本である。面子や義理を重んずる彼らのおもてなしでは、建前が前面に出る。特に客を褒めちぎる表現の豊かさ

「ママのお客」

原題：مهمان مامان

2004年/イラン/ペルシア語/108分/DVD(日本語)なし

監督：ダリーウシュ・メヘルジュイ

出演：ゴラフ・アディネ、ハサン・プールシラズィほか

2019年2月のみんぱく映画会にて上映予定(詳細は12頁をご覧ください)



願掛け行事での共食  
(撮影：羽田美希、スィールジャー、2006年)

きたら、口下手な日本人には到底太刀打ちできない芸術品である。客の方には、主人のことばや態度の端々から相手の本音を忖度して対応する感受性が求められる。作品中のお母さんは、母子家庭で苦学して空軍士官になった甥が自慢の種なのに、甥夫婦を「気遣いの要る客」とよぶ。大切だからこそ、十分にもてなしやれなければ面目丸つぶれだからである。甥夫婦もそんなお母さんの立場をわかっていればこそ、何度も席を立とうとするが、叔母夫婦への遠慮が邪魔をして、結局一晩泊まっていく羽目になる。建前と本音が交錯し、善意の応酬の裏で困惑顔を見せる様子に、「そうそう、まったく大変だよ」と身につまされつつ苦笑させられる。話は大きくなるが、そんな人情の共通点こそイランが大の親日国である理由のひとつに違いない、とわたしは常々思っている。

映画へのオマージュ

お母さんの奮闘ぶりをよそに、一人で自分流のおもてなしに突っ走ってしまうお父さんも、味わい深いキャラクターである。原作ではタイル工場の労働者なのだが、この作品ではつぶれかけの映画館で雑用をしている映画マニアに変わっている。イラン映画だけでなく外国映画も熱愛する彼の家は、なけなしの金をはたいて買った映画ボスターやスターのプロマイドだらけで、お客にも古いイラン映画のビデオを見せ、うん



女たち、お客のために知恵と食材を出し合う(映画「ママのお客」より、提供：福岡市総合図書館)

ちくを傾けて悦に入る。最初は汚いひげ面のおっさんにしか見えないお父さんが、映画の魅力を熱弁し、歌ったり踊ったりするうちに、何だか可愛く思えるようになるのはご愛敬である。おそらくスクリーンの向こうにいる、監督をはじめとするスタッフの映画愛がそのまま投影されているからなのだろう。そして映画好きなら、随所で挿入される国内外の映画作品やスターの写真、ビデオや宣伝文句のバラエティの豊富さを堪能する、そんな楽しみ方もできる作品である。

## ハニーホテル



## What's in a name?

おおさわ よしみ  
大澤 由実

民博 機関研究員

二〇一七年の末、タイの首都バンコクにあるひとつのホテルが閉館した。その名は「ハニーホテル」。併設されたレストラン・ハニーのタイ料理がなかなか美味しくて、よく食べに行っていたのだ（ちなみにスパイスで和えた肉を揚げたラープ・トートが絶品だった）。

ある日たまたま、このハニーホテルにはGーホテルジーアールとしての歴史があることを知った。

Gーホテルとは？ 時は六〇年代、ベトナム戦争までさかのぼる。多くのアメリカ軍兵士（Gー）がR&R（レスト・アンド・レクリエーション）とよばれる保養休暇の制度を利用してタイを訪れたのだ。当時タイでは兵士を迎え入れるホテル、バー、ナイトクラブなどが続々とオープンし、観光産業が一気に発展したそう。これにはもちろん性的娯楽産業の発展も含まれる。

バンコク市内でも次々と開業したGーホテル、どこも一泊五米ドルほど、プール付き、コーヒーを提供する、そしてゲスト・フレンドリー、つまり売春婦などを部屋に連れてきてても文句を言わないなど、共通の条件があったそう。

これらのホテルの名前がなかなか面白い。まず、「フロリダ」「マイアミ」「マンハッタン」「アトランタ」「ボストン」など、アメリカの地名をつけたものが多い。兵士が祖国や故郷を懐かしめるような名前をつ

けたのだろう。きつと「ロンドン」や「パリ」では駄目であったに違いない。

親しい人呼びかける「ハニー」に加え、「エンバシー（大使館）」「グレース（優雅）」「リバティー（自由）」「フェデラル（連邦）」などもある。これらの名前今の時代に聞くと古めかしい、言っては悪いが少々安っぽい響きをもつ名前だ。この時代のホテルの名前は、そんなものだったのだろうか。そして「自由」「連邦」、じつにアメリカらしいネーミングである。アメリカ軍兵士が相手となると、「ロイヤル（王室の）」とか「エンパイアー（帝国）」などは選択肢になかったのかもしれない。

ベトナム戦争終結後、Gーホテルはヨーロッパなどからの外国人観光客を対象に経営を続けた。しかし、ここ一〇年程でこれらのGーホテルの閉館が相次いでいる。バンコクでは建築ラッシュが続いていて、古いホテルや建物がどんどん壊されている。インターネットでホテルのレビューを見ると、ハニーホテルの閉館を悲しむ声が多い。「ひとつの時代が終わった」。元Gーを名乗る人からのコメントだ。

ハニーホテルの古ぼけた建物とレストラン、いつも昼間からビール片手に何となく時間を過ごしている年配の白人男性客の様子、そしてホテルと壊した後はどうなるかわからないと言っていたベテラン従業員と絶品ラープ・トートの味がすでに懐かしい。

## 編集後記

昨年12月号でロシア革命100周年にちなんだ特集を組んだ。今年は1968年から50周年ということで学生運動と人類学にかかわる特集とした。本特集の内容からもわかるように、過去のひとコマにするには50年は近すぎることもあったか、1968の評価は定まっていない。そうした多様な意見を念頭におきつつ、たとえば本館が当時おかれた状況を読み比べるのも一興かもしれない。

その一方で「ノンポリ」「ゲバ棒」など意味のわからない言葉が多いと小生よりずっと若い編集室の方からいわれ、50年ひと昔と再認識もした。小生の学生時代、学生運動は完全に下火であったが、学生生活が長かったこともあってか上記のことばはなんとなく耳にしていた。そういえば他大学に遊びに行った際、キャンパス内に「ラブワゴン粉碎!」に類する文言の書かれた立て看板を目にして、その諧謔に感銘したことを突然思い出したが、今ではこちらにも注釈が必要でなかろうか。(丹羽典生)

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
 (電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



### ●表紙：上から

1. 東大紛争 1968年11月29日 (提供：東京大学文書館)
2. 梅棹忠夫初代館長の『EEM』の手書き原稿 (本館所蔵)
3. 水俣病歴史考証館に展示されている水俣病闘争のゼッケン (撮影：平井京之介、2011年)
4. 新宿の地図 (『週刊アンボ』1969年、0号、21頁、国立歴史民俗博物館所蔵、撮影：国立歴史民俗博物館管理部博物館事業課 勝田徹)

## 次号の予告

特集

## 「凧」(仮)

## 月刊みんぱく 2018年12月号

第42巻第12号通巻第495号 2018年12月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生 (編集長) 寺村裕史 三島禎子

南真木人 山中由里子 吉岡乾

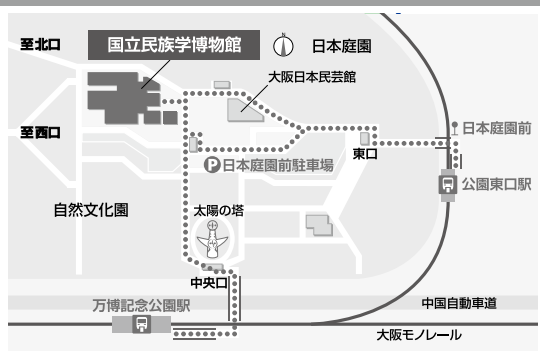
デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 毎日新聞社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

# みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

2019年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

## アーミッシュ・キルトを 訪ねて

プレーン・ピープル（簡素な人びと）とも呼ばれるアーミッシュが無地の布をパッチワークしてつくるベッドカバーは、あざやかな色合いと幾何学模様から生まれるデザインや細やかなステッチで20世紀後期に注目を集めました。今回の企画展で紹介される日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をカレンダーでたどります。

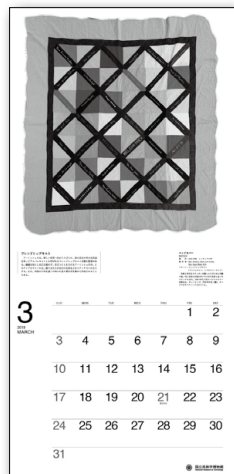
好評開催中！

12月25日(火)まで

企画展

「アーミッシュ・キルトを訪ねて  
——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

場所：国立民族学博物館 本館企画展示場



定価 1,620円(税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,458円(税込)

サイズ 29.5cm × 29.5cm (開くとタテ59cm × ヨコ29.5cm)

オールカラー 28頁中綴じ

◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊1,296円(税込)です。

◆通信販売の場合、別途送料手数料が必要です。

お問い合わせ

国立民族学博物館  
ミュージアム・ショップ  
水曜日定休  
email: contact@senri-f.or.jp

12月中開催！ 友の会感謝フェア

ミュージアム・ショップご来店の友の会会員の方は、上のカレンダーをはじめ世界各地のグッズを店頭価格より20%オフでお買い求めいただけます。

※書籍・食品・CDなど、対象外の商品もございます。

国立民族学博物館  
友の会機関誌

## 人を知り、世界を知る 『季刊民族学』

『季刊民族学』は「国立民族学博物館友の会」の機関誌です。友の会にご入会いただければ、定期的にお届けいたします。最新号は、来年2月に開催する企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」に関する特集です。ぜひ、『季刊民族学』に目を通してから企画展に足をお運びください。

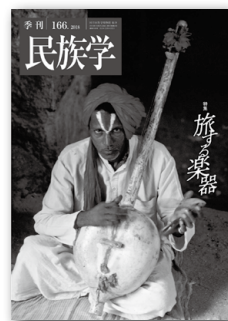
企画展

「旅する楽器——南アジア、弦の響き」

会期：2019年2月21日(木)～5月7日(火)

場所：国立民族学博物館 本館企画展示場

展示されている楽器や南アジアの文化への理解が一層深まることでしょう。



166号 2018年秋  
特集「旅する楽器」

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会  
電話 06-6877-8893 (平日 9:00～17:00)  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

詳細は千里文化財団までお問い合わせください。

本誌はお試し購入も可能です。

